

## 参加者特性報告書

27年度実施した主たる事業に関し、参加者アンケートを実施し参加者特性分析を愛媛大学に依頼した。さらに、過去に愛媛大学で実施していた公民館利用高齢者調査と比較し、公民館のヘビーユーザーとの違いを分析してみた。

### 目次

1. どのような人が参加しているのか 2
2. 各会場の参加者の満足度 5
3. 参加者の「普段の近隣（地域）の人との関係」および「生きがい」の所在 10
4. 「普段の近隣（地域）の人との関係」に関する詳細分析 17
5. 「生きがい」に関する詳細分析 22
6. おわりに 26
7. 素集計表および自由記述一覧 27



## 1. どのような人が参加しているのか

まず、参加者の属性を概観しておきたい。はじめに性別である（図 1-1）。

延べ参加者の性別としては男性が多く、7割弱を占めている。女性の参加者は男性の参加者の半分程度である。コミュニティの在り方や地域教育実践というテーマについては、男性の方が研究会や交流集会などに意欲的に取り組む姿勢があるのかもしれない。今後の研究会や交流集会の活性化に向けて、女性の参加をうながす工夫も検討されてよ



図1-1. 参加者の性別 (%)

いだろう。

次に、参加者の年齢構成を世代別にみたのが図 1-2 である。参加者の年齢は「50 歳代」が 38.4%と最も多く、次いで「40 歳代」が 24.4%となっている。「40 歳代」と「50 歳代」という、学校現場や各種職場で中核的な役割を担う年齢層の参加者が多い。他方で、割合としてはそう高くはないものの、10～20 歳代の若者層、また 60～70 歳代のシニア層も一定数参加している。これらの研究会や交流集会が、世代間交流の場としてき

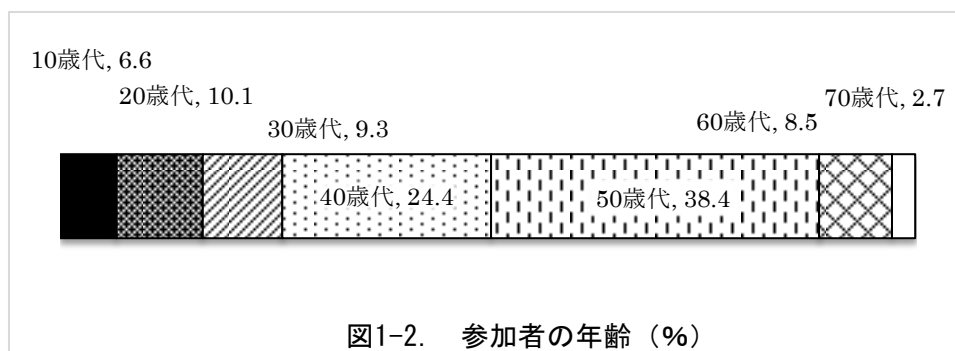
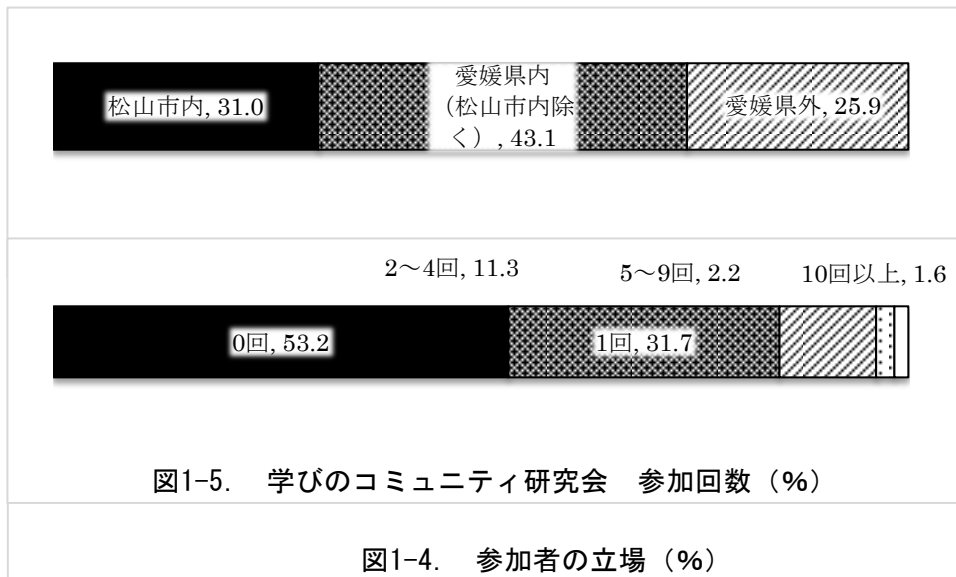


図1-2. 参加者の年齢 (%)

わめて有効な機会となりうることを期待できよう。

次に、参加者の居住地を整理したのが図 1-3 である。

学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会の各会場の参加者数およびその比率を見ると、松山市で行われた「学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016 年 1 月）」が最も参加者数が多いのに対して、参加者の居住地は「松山市内」が 3 割程度となっている（報告書末尾の表 7-1 を参照）。見方を変えれば、人口比で考えれば多数派の松山市内居住者より、少数派の小規模都市・町村居住者において、学びのコミュニテ



ィ研究会や地域教育実践交流集会への関心が高いと考えることができるだろう。また、「愛媛県外」からの参加者も 25.9%と比較的多く、こうした研究会や交流集会が県内外から関心を集めていることが分かる。

次に、参加者の職業を中心に参加者の立場について整理した (図 1-4)。

延べ参加者数においてもっとも多かったのは、「学校教職員」であった。延べ参加者数全体に占める割合は、37.6%と、4 割に迫る参加者数であった。「学校教職員」に次いで多いのは「行政職員 (国・県・市町村)」であり、同 26.8%であった。「PTA 関係者」は 0.8%、「民間企業」は 1.2%と、ごくわずかであった。

「その他」の内訳からは、教育に関して地域全体で支えようという人々がこの研究会や交流集会に参加していることが分かる。その他の内訳は、以下のとおりである。

- ボランティア団体
- 市民団体
- まちづくり学校双海人
- 高校生・大学生 (部活動の一環として参加している者を含む)
- 放課後児童健全育成事業の関係者 など

では、「学びのコミュニティ研究会」や「地域教育実践交流集会」への参加者は、これまでどの程度こうした活動への参加経験を有しているのだろうか。初めて参加する人を多く巻き込んでいる活動なのか、それとも毎回同じようなメンバーが集まる傾向が強い活動なのかを具体的に把握しておくことは、今後の研究会や交流集会の運営方針を検討するための重要な資料となるだろう。それぞれへの参加回数を確認しておきたい。

図 1-5 および 1-6 は、今までに、学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流



集会受到「何回ぐらい参加されましたか」という質問への、それぞれへの回答結果を示したものである。

「学びのコミュニティ研究会」については、「0 回」、すなわち初めて参加した人が 53.2%と、約半数を占めている。「1 回」以上、すなわち複数回参加したことがある人と、初参加の人がちょうど半数ずつということから、1 度参加した後に興味をもち継続的に関わるメンバーと、新たに加わるメンバーとがバランスよく集まっている会であると評価できよう。とはいえ、2 回以上参加したことがある参加者は全体の 15%程度に過ぎず、継続メンバーの割合が十分といえるかということ、必ずしも楽観視できる数字ではないだろう。何度も参加してくれる人を増やしていくために、今後の運営のあり方や内容、開催案内の方法について検討していくことが必要であろう。

「学びのコミュニティ研究会」同様、「地域教育実践交流集会」についても、今回初めて参加した人が 48.0%と約半数を占めていた。学びのコミュニティ研究会に比べて、「1 回」以上の参加率がやや高くなっており、「2~4 回」以上の参加者が 20%程度存在することは、継続メンバーと新規メンバーが活発に交流する機会として適切なバランスが取れていると評価できるだろう。

## 2. 各会場の参加者の満足度

次に、各会場での内容に対する参加者の感想や意見について見ておきたい。

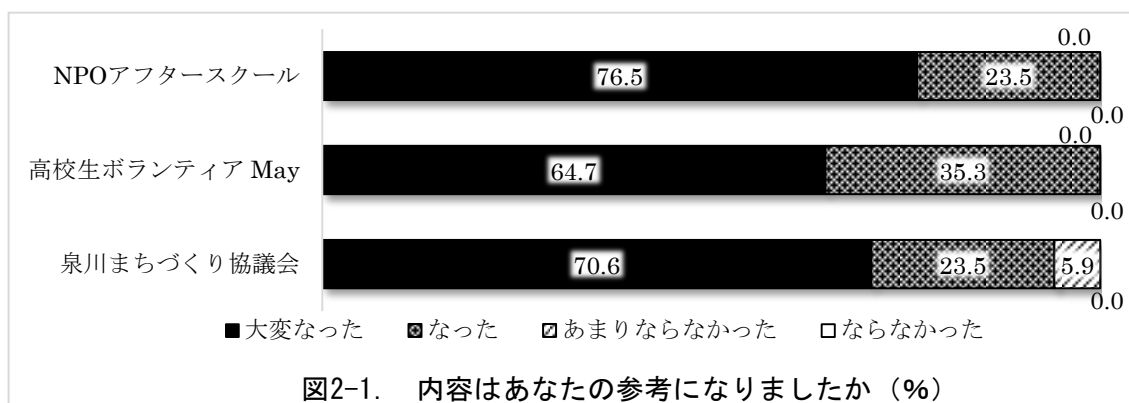
各会場での事例発表・活動内容は、必ずしも同一ではない。毎回異なる内事例発表・活動内容で、多様な実践や考え方を学べる機会が提供されている。そこで、本節では、下記に示した会場別に実施内容に対する参加者の満足感や感想・意見を整理する。

- 2-1. 学びのコミュニティ研究会 in 新居浜 (2015年8月)
- 2-2. 学びのコミュニティ研究会 in 愛南 (2015年10月)
- 2-3. 地域教育実践交流集会 (2015年12月)
- 2-4. 学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月)

その後に、運営の在り方や今後の予定に対する参加者からの意見や感想について、全会場分（一部除く）のデータを整理しておきたい。

### 2-1. 学びのコミュニティ研究会 in 新居浜 (2015年8月)

学びのコミュニティ研究会 in 新居浜 (2015年8月) では、下記3つの事例発表が行われた。



「本日の3つの発表事例はあなたの参考になりましたか？」という質問に対して、「NPOアフタースクール」と「高校生ボランティア May」に「大変なりました」「なりました」と回答した割合は100%であった。また、「泉川まちづくり協議会」の報告に対して「大変なりました」「なりました」と回答したのは94.1%であった。

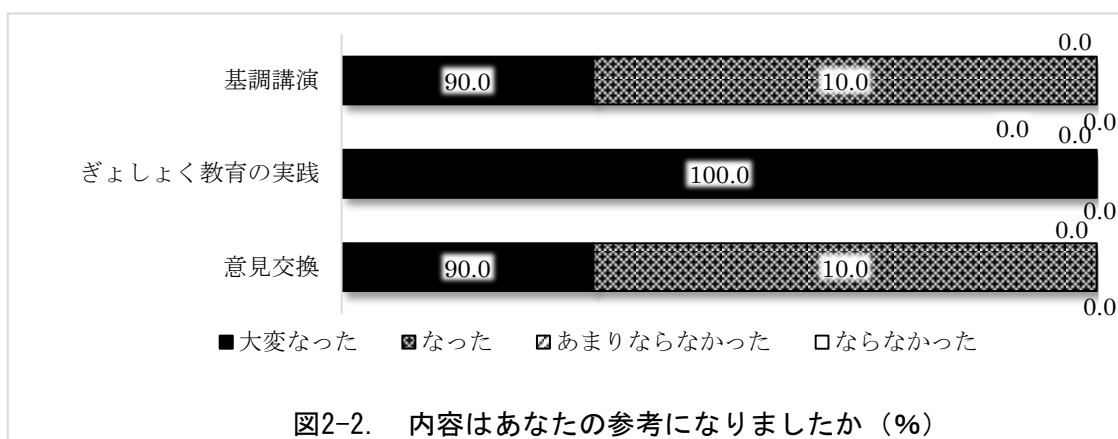
上記のように回答した理由を尋ねた自由記述欄において、「どの実践もすばらしい。3つの発表の共通点は、楽しさ→当事者意識→付加価値だと思った。人が集まる要素を再認識できた」「地域と子どもをつなぐ活動により、子どもの要望を含め、現状がよくわかりました。大人として地域や子どもたちとどう関わっていけばいいか、知見を深めた」

「各事例とも、自らの活動を考えるうえで参考となった」など、各実践事例に対して「参考になった」との意見が多数記述されていた。

しかしながら、「若人の力、地域の力はすごいです」「それぞれの立場、地域、年代で思いやりのある活動にふれることができました」と実践事例に感銘を受けている意見や感想が多く見受けられたにもかかわらず、実践の内容を今後の自分に吸収していこうとする記述は、あまり見受けられなかった。

## 2-2. 学びのコミュニティ研究会 in 愛南 (2015年10月)

学びのコミュニティ研究会 in 愛南 (2015年10月) では、下記3つの講演、事例発表、意見交換が行われた。



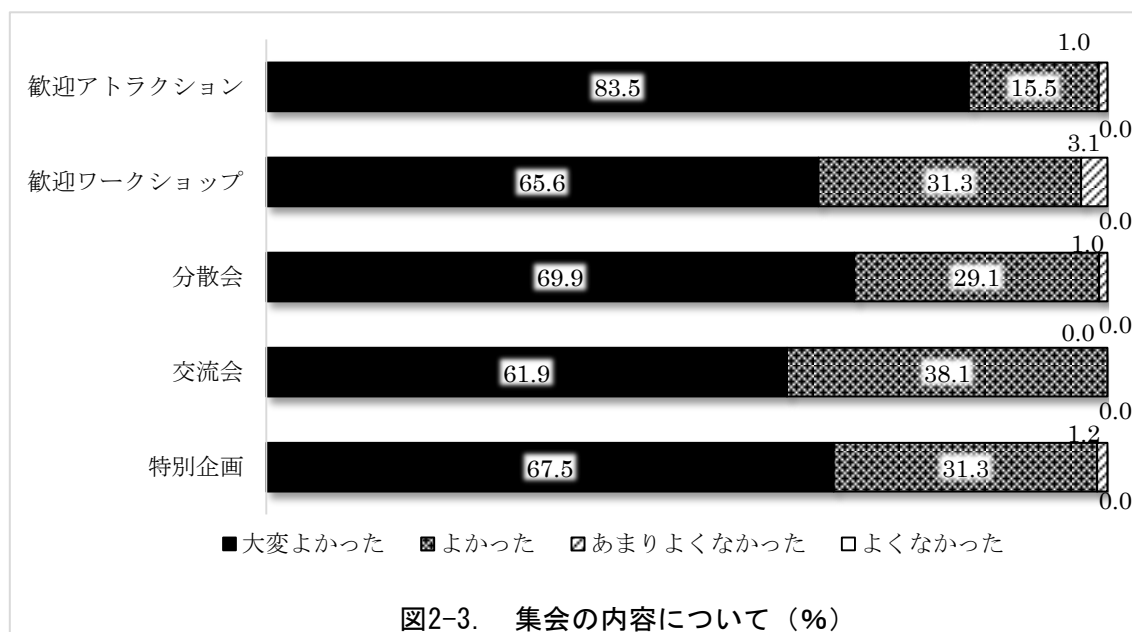
「本日の3つはあなたの参考になりましたか」という質問について、「ぎょしょく教育の実践」に関する事例発表に対して「大変なりました」と回答した割合が100%であった。「基調提案」「意見交換」については、「大変なりました」と回答した割合が共に90.0%であり、「なりました」と回答した割合もともに10.0%であった。全体を通して、全ての内容が参考になったと感じていることが分かる。

上記のように回答した理由を尋ねた自由記述欄において、「魚食教育という食の教育から、子どもに伝えたい全ての要素が含まれていることがすごい！また、魚食教育を通しての道德教育が、経済効果も生んでいるところがさらにすごい！素晴らしい」といったように、「ぎょしょく教育の実践」に関する肯定的な記述が多くみられた。また、「魚食教育のお話では、お話を聞きながら、自分の過ごした故郷について思い出しましたが、自分のすごした地域の良さを大人になって話せる事は大切だと感じました」など、自分に還元するような記述も見受けられた。また、学校現場・教職員への期待として、「愛南町が地元でありながら、あまり愛南について知らなかった。愛南町の為に力を注いでおられる方がいることを知り、有り難いことで、すごいなあと感じました。水産部で愛媛が全国2、3位であることは、もっとほこるべきことだと思う。まず、教職員（愛南

の) が、今日のシンポジウムを聞くべきだと思った。子どもに発信できない。そして全国に知名度を上げてほしい」との意見も述べられていた。

### 2-3. 地域教育実践交流集会 (2015 年 12 月)

地域教育実践交流集会 (2015 年 12 月) は、下記 5 つの内容から構成された交流集会であった。

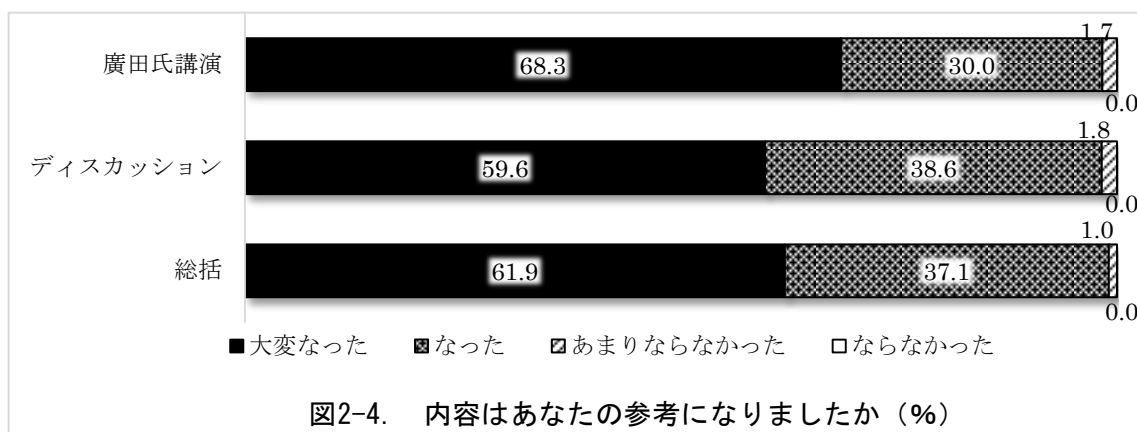


「交流会」について、「大変よかった」「よかった」と回答した人が 100.0%であった。どの内容も「大変よかった」「よかった」が 95.0%以上を占めており、非常に有意義な交流集会だったとして参加者から評価されている。

こうした回答傾向と対応するように、上記のように回答した理由を尋ねた自由記述欄において、「アトラクションでは集会の始めから感動させてもらいました。ワークショップでは緊張をほぐしてもらい、リラックスした状態で分散会・交流会にのぞむことができました。様々な方の発表やお話しを聞くことができ、本当に貴重な体験となりました」など、集会全体に対する肯定的な記述が多かった。他方、運営に対する改善を求める記述として、「発表者以外の活動についても聞きたかった」や「分散会は、時間の管理をしっかりできればよりよいものになったと思います」といった意見があった。また、議論を活性化してほしいとの立場から「核心にせまる話し合いにはならなかった」「話題提供の材料は良いが、分散会での議論の柱の整理、深めていく筋道をコーディネートする人がいても良かった」といった記述が見受けられた。運営方法をさらに改善していくうえで、ファシリテーターの役割を明確化していく必要があるだろう。

## 2-4. 学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月)

学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) は、下記2つの内容と総括で構成された。



「本日の2つの内容はあなたの参考になりましたか」との質問において、「大変なりました」「なりました」と回答した人が最も多かったのは「総括」であり、99.0%であった。とはいえ、集計結果からは、当日すべての講演や報告、討論を、多くの参加者が興味深く聴いていたことが分かる。

上記のように回答した理由を尋ねた自由記述欄においては、集会に対する肯定的な記述や、コミュニティスクールの重要性を再確認することに関する記述がほとんどであった。しかし、なかには「まずは教職員の仕事、地域の事情の見える化が有効」という、コミュニティスクール云々以前の問題を指摘する記述もあった。

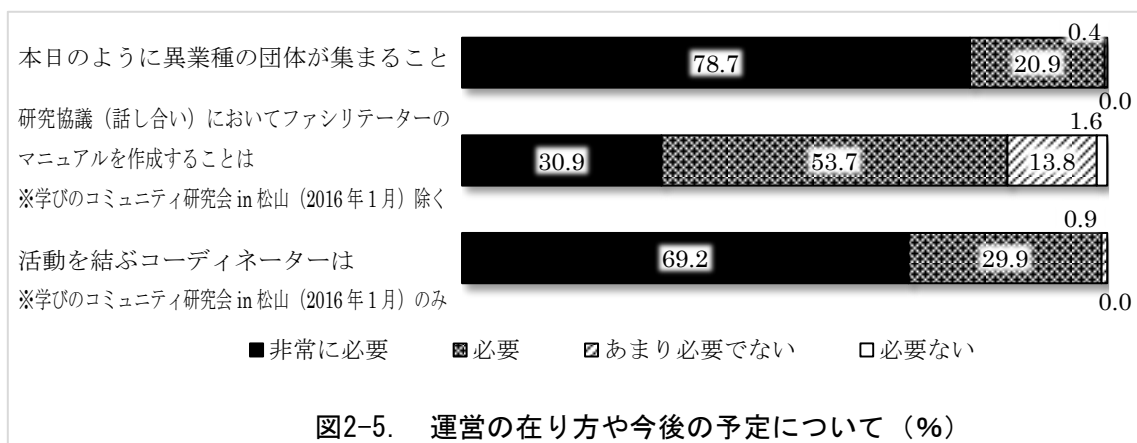
他方で、「公民館関係者がほとんどいないなかでコミュニティスクールの議論をしても無意味」といった記述が見受けられた。会全体の運営等に関する意見として、学校関係者だけではなく、教育に携わるすべての機関がそうした内容について学習・共有・連携していく必要性を訴える記述が、複数見受けられた。

## 2-5. 運営の在り方や今後の予定に対する回答 (全会場)

図2-5には、運営の在り方や今後の予定に対する延べ参加者の回答を示した。学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) においてのみ、「研究協議 (話し合い) においてファシリテーターのマニュアルを作成することは」(必要か) という項目に代えて「活動を結ぶコーディネーターは」(必要か) という項目を設け、その必要性の有無を尋ねた。

まず、異業種の団体が集まることを「非常に必要」「必要」と回答した人の割合の合計は90.6%にのぼっているに注目したい。このことから、ほとんどの参加者が、自分とは異なる立場や職種の人々と関わることを、重要だと感じていること





が理解できるだろう。

学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）以外での質問紙で尋ねた「ファシリテーターのマニュアルを作成することは」（必要か）という項目に対しては、84.6%の参加者が「非常に必要」「必要」と回答している。ちなみに、ファシリテーターと司会の違いについて疑問を投げかける自由記述が見受けられた。ファシリテーターとしてどのように議論を方向付けたり深めたりすることが必要なのか、その方法は誰もが身につけているわけではないだろう。今後の運営上の課題として検討していく必要があると考えられる。

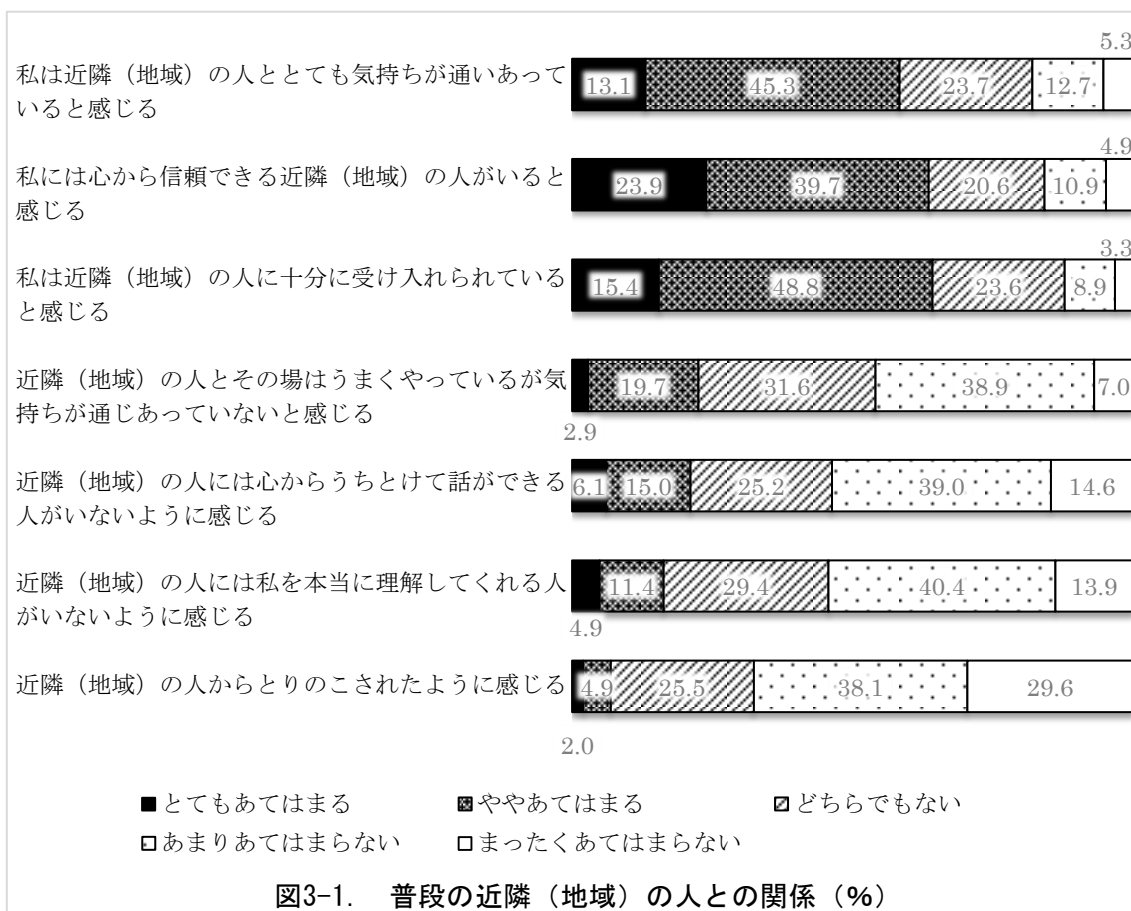
学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）のみでの質問紙で尋ねた「活動を結ぶコーディネーターは」に対しては、99.1%の人が「非常に必要」または「必要」と回答している。各機関にまたがり地域に広がる活動を継続させたり活性化させたりしていく場合には、それを担当するコーディネーターの存在が不可欠であると、強く認識されていることが確認された。

### 3. 参加者の「普段の近隣（地域）の人との関係」および「生きがい」の所在

それでは、学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会への参加者は、普段の生活のなかで近隣（地域）の人との関係についてどのように感じているのだろうか。このことについて問うた質問項目に対する回答結果（全会場分）を、図3-1に示した。

「私は近隣（地域）の人ととても気持ちが通いあっていると感じる」の項目では、「とてもあてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答した割合が58.4%を占めている。約6割の人が近隣の人との関係が良好であると感じているということである。同様に、「私には心から信頼できる近隣（地域）の人がいると感じる」の項目には、「とてもあてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答した割合が63.6%、「私は近隣（地域）の人に十分に受け入れられていると感じる」の項目では、「とてもあてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答した人が64.2%と、約6割の参加者が近隣（地域）の人と良好な関係を築いていると考えている。

また、「近隣の人とその場はうまくやっているが気持ちが通じ合っていないと感じる」という質問では、「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した人が77.5%と約8割であった。「近隣の人には心から打ち解ける話がで



きる人がいないように感じる」という質問には、「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した人が78.8%と約8割に迫っており、多くの人は、打ち解ける話ができる近隣の人がいると感じているようである。「近隣の人には私を本当に理解してくれる人がいないように感じる」の項目には、「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した人が83.7%となっており、「近隣の人から取り残されたように感じる」という質問に「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した人は、93.2%である。こうした結果から、多くの人が近隣の人との関係が良好であると感じており、近所付き合いという上辺だけの関係ではなく、心から通じ合っていると感じている人が多数派であることが理解できる。

しかしながら他方で、「近隣（地域）の人とその場はうまくやっているが気持ちが通じあっていないと感じる」「近隣（地域）の人には心からうちとけて話ができる人がいないように感じる」に「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した人が20%を超えている点は注意すべきであろう。参加者のうち2割程度は、近隣の人と表面的な付き合いをしているだけだと感じている、あるいは心から打ち解けて話をするのができないなどの意識を有しているのである。

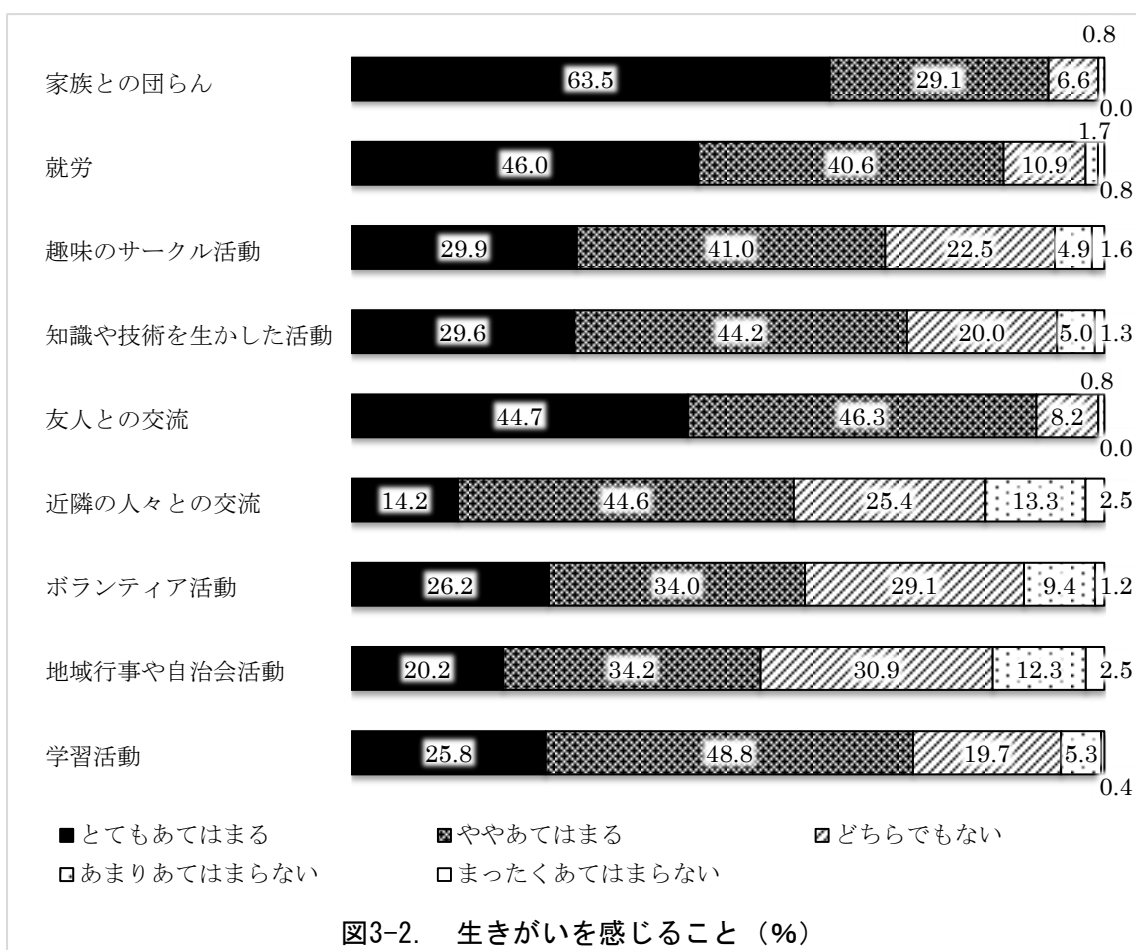
しかし、どのような人が、どのような意識を有しているのかを、こうした全体的な単純集計から明瞭に把握することは困難である。立場や年齢に応じて、あるいは学びのコミュニティ研究会や地域教育実践交流集会への参加回数などに応じて、近隣（地域）の人とのつながりや紐帯は、異なるのであろうか。これらのことについては節を改めて詳細に分析することとする。

本節の最後に、参加者が「生きがいを感じる」として尋ねた質問への回答結果（全会場分）を、図3-2に示した。

生きがいを感じている割合が最も多いのは、「家族との団らん」である。「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した割合を合計すると92.6%にのぼる。家庭生活を中心とした私的生活の充実が、世代を超え、立場を超えて、人々の「生きがい」の重要な要素となっていることが理解できる。

では、そうした私的生活以外の側面では、どのような社会的・地域的な活動が「生きがい」として感じられているのだろうか。

まず、「就労」を生きがいに感じている割合は、「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した割合を合計する86.6%と高く、自分の仕事を生きがいとしている人が多いことが分かる。また、「近隣の人々との交流」の項目については、「とてもあてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答した人の割合が58.8%であった。先に見たように、図3-1では、近隣（地域）の人との関係に関して良好であると回答した人が6割程度を占めていた。それに対応するように、近隣の人との交流に生きがいを感じる割合も6割程度となっており、近隣の人との関係が良好な場合にはそれが「生きがい」につ



ながっていく可能性が示唆されている。

ただし、「とてもあてはまる」のみに着目するならば、「近隣の人々との交流」は群を抜いて最も低い値となっている。「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した割合の合計に着目した場合、「地域行事や自治会活動」が最も少なく、54.4%であった。このことは、地域コミュニティの活性化に向けた大きな課題であるといわざるを得ない。どのような人が、どのような活動に生きがいを見出す傾向にあるかは節を改めて分析する。

ここまで、延べ参加者によるアンケート回答結果から、参加者の近隣（地域）での人間関係の状況や「生きがい」の所在について明らかにしてきた。注目すべき点はすでに解説してきたとおりである。しかしながら、ここまでの分析は延べ参加者による回答結果の分析であった。各回の参加者のなかには重複して参加している者が存在しているため、延べ参加者の回答のなかには、同一人物による回答が複数含まれている可能性が大いにある。同一人物による回答が複数含まれている場合、参加者の属性と地域生活の意識の関連性を分析するなど、詳細な分析を行うのに適切ではない。

集会への参加者は、地域教育実践交流集会（2015年12月）と学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）の2回分で、参加者の89.6%を占めている（報告書末尾の表5-1を参照）。両会において、各回100名以上のアンケート回答者が得られているの

である。したがって、以下では、統計的処理に耐えうるサンプルサイズを有する、地域教育実践交流集会（2015年12月）参加者による回答結果と、学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）参加者による回答結果のそれぞれについて、改めて確認していく。

なお、参考までに示しておくが、各会場への参加者の立場は、表3-1のように大きく異なっている。地域教育実践交流集会（2015年12月）への参加者は、「公民館関係者」「学校教職員」「行政職員」「NPO関係者」「その他」がそれぞれ一定数いるものの、学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）への参加者は、「学校教職員」と「行政職員」で占められている。こうした参加者構成を念頭に置きながら、改めて参加者の普段の生活における近隣（地域）の人との関係や、生きがいの所在について探っていきたい。

まず、地域教育実践交流集会（2015年12月）への参加者による「近隣（地域）の人との関係」および「生きがい」に関する質問項目への回答結果は、14頁に示したとおりである。前者についていえば、5～6割の参加者は「私は近隣（地域）の人ととても気持ちが通いあっていると感じる」「私には心から信頼できる近隣（地域）の人がいると感じる」「私は近隣（地域）の人に十分に受け入れられていると感じる」の項目に、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と回答している。しかしながら同時に、2～3割の参加者が「近隣（地域）の人とその場はうまくやっているが気持ちが通じあっていないと感じる」「近隣（地域）の人には心からうちとけて話ができる人がいないように感じる」「近隣（地域）の人には私を本当に理解してくれる人がいないように感じる」といったネガティブな項目に対して「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と回答していることも見逃せない。表3-1に示しているように、地域教育実践交流集会（2015年12月）の参加者は、多様な立場の人びとから構成されていた。そうしたことが、このような回答傾向を生じさせた背景として考えられよう。

多様な立場の人が参加した地域教育実践交流集会（2015年12月）に対して、学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）の参加者は、その大半が学校教職員と行政

表3-1. 会場ごとの参加者の立場（％）

	公民館関係者	学校教職員	PTA関係者	行政職員	民間企業	NPO関係者	その他	合計
学びのコミュニティ研究会 in 新居浜（2015年8月）	11.8	5.9	5.9	11.8	5.9	23.5	35.3	100.0(17)
学びのコミュニティ研究会 in 愛南（2015年10月）	0.0	77.8	0.0	0.0	0.0	11.1	11.1	100.0(9)
地域教育実践交流集会（2015年12月）	13.1	16.8	0.0	19.6	1.9	30.8	17.8	100.0(107)
学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）	0.9	58.1	0.9	37.6	0.0	1.7	0.9	100.0(117)
合計	6.8	37.6	0.8	26.8	1.2	16.0	10.8	100.0(250)

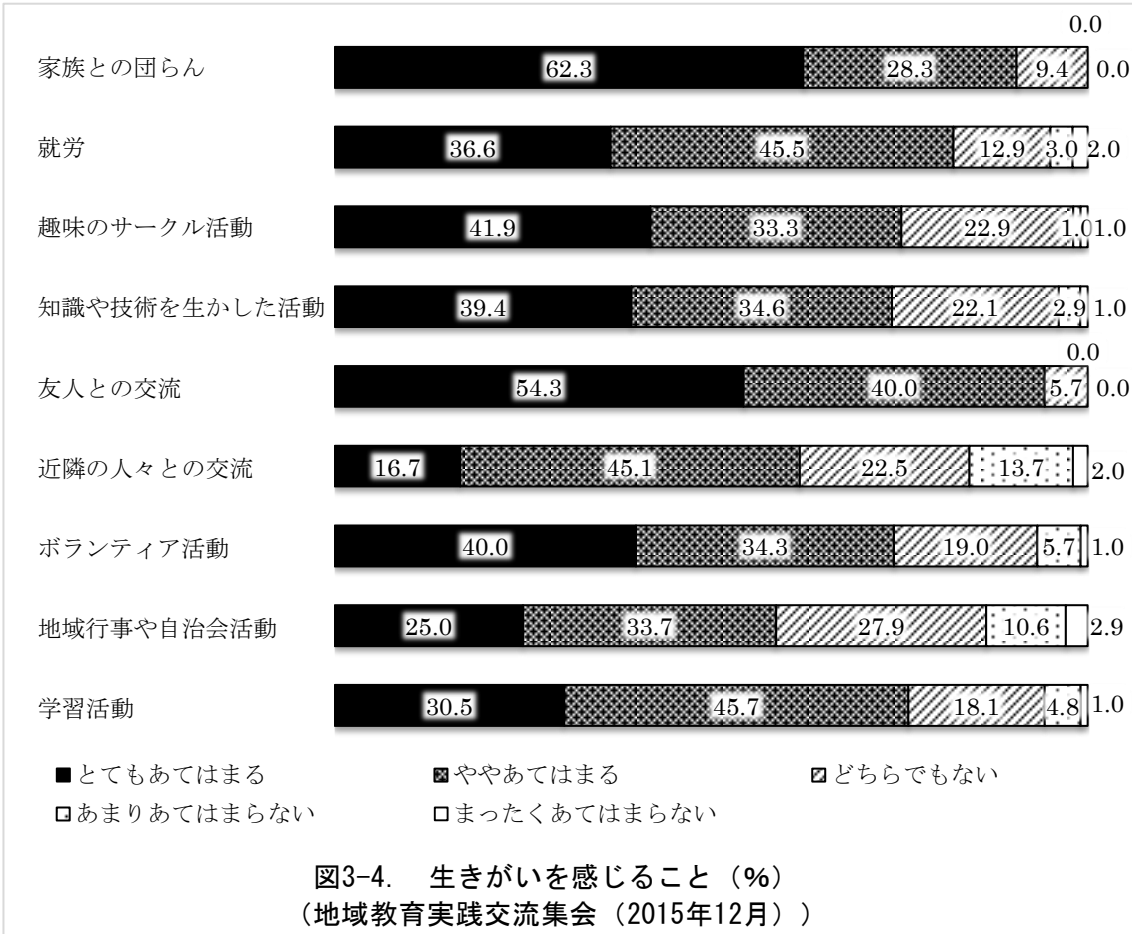
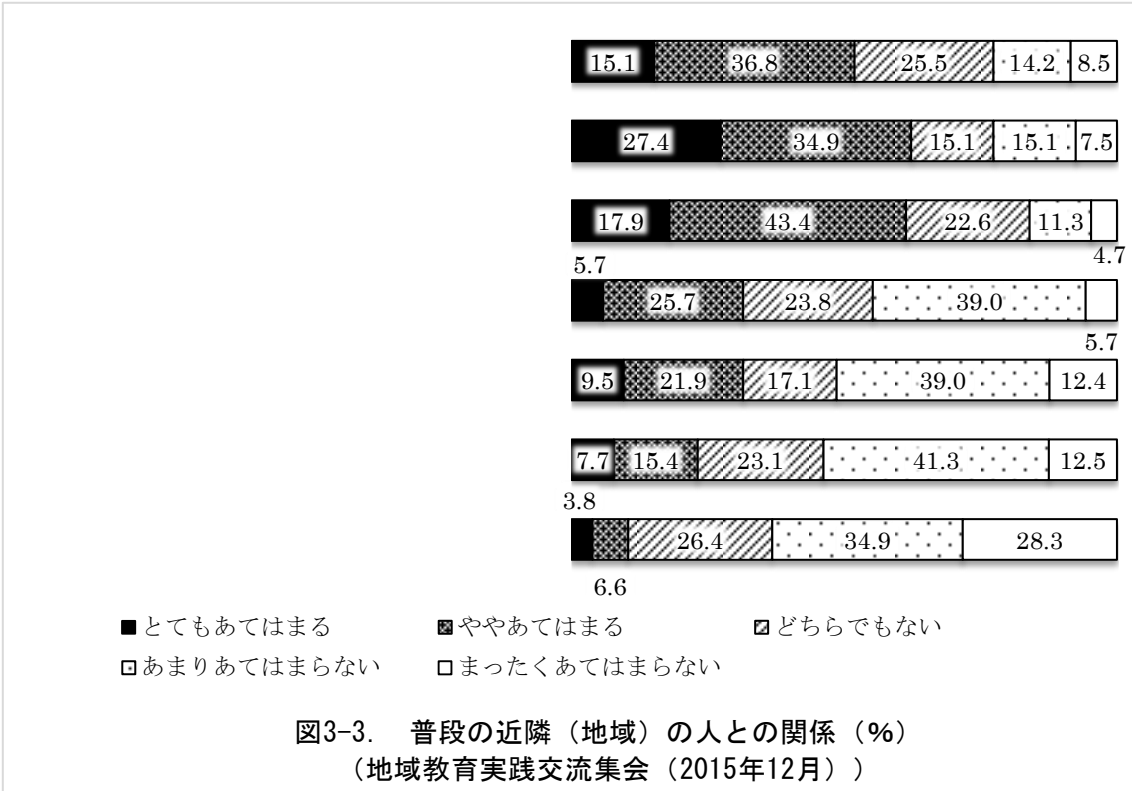
職員であった。そこで次に、学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）の参加者による「近隣（地域）の人との関係」および「生きがい」に関する質問項目への回答結果を見てみよう。

結果は15頁に示したとおりである。前者についていえば、「私は近隣（地域）の人ととても気持ちが通いあっていると感じる」「私には心から信頼できる近隣（地域）の人がいると感じる」「私は近隣（地域）の人に十分に受け入れられていると感じる」といったポジティブな項目に「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と応えた人の割合は、5～6割であった。しかし、地域教育実践交流集会（2015年12月）の結果と比較すると、「とてもあてはまる」と回答した人の割合がおしなべて低くなっている。「私は近隣（地域）の人ととても気持ちが通いあっていると感じる」の項目では、半減している。他方、「近隣（地域）の人とその場はうまくやっているが気持ちが通じあっていないと感じる」「近隣（地域）の人には心からうちとけて話ができる人がいないように感じる」「近隣（地域）の人には私を本当に理解してくれる人がいないように感じる」といったネガティブな項目に対して「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と回答した人の割合は1割強となっている。これも地域教育実践交流集会（2015年12月）での結果と比較すると、半分程度の低い値となっている。

以上の比較（図3-1および図3-3）から、近隣（地域）との強いつながりを感じている立場、あるいは近隣（地域）において疎外感を強く有している立場の人は、学校教職員と行政職員以外の、公民館関係者やNPO関係者、その他の人びとであると考えられる。

本節の最後に、「生きがい」の所在について尋ねた質問項目について両会場の結果を比較しておきたい（図3-2および図3-3）。

公民館関係者やNPO関係者が一定数参加した地域教育実践交流集会（2015年12月）において、学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）での回答結果よりも、「趣味のサークル活動」「友人との交流」「ボランティア活動」などで生きがいを感じることに「とてもあてはまる」と回答する参加者の割合が非常に高いことがわかる。他方で、ほぼ学校教職員と行政職員の2者で構成される学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）の参加者は、多様な立場の人が参加した地域教育実践交流集会（2015年12月）への参加者よりも、「就労」に生きがいを感じる傾向にあるといえよう。



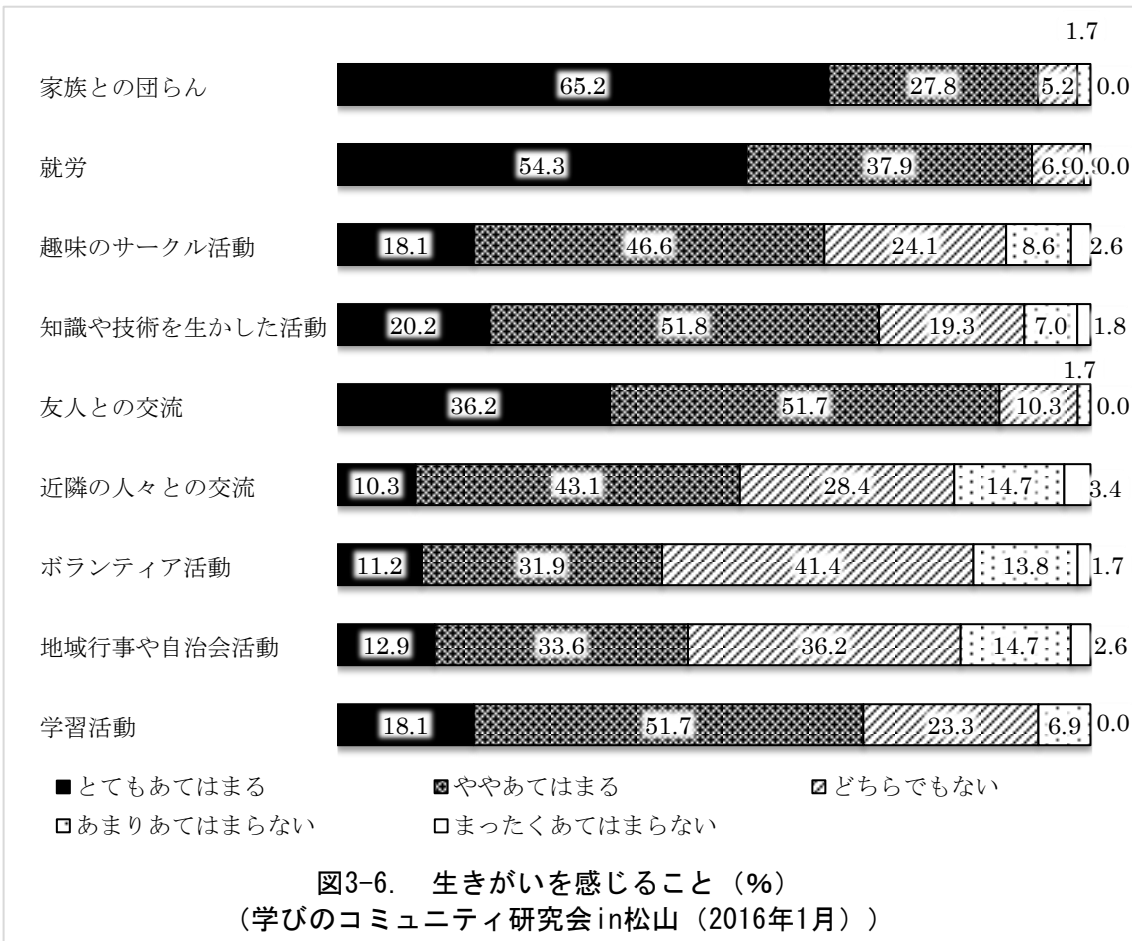
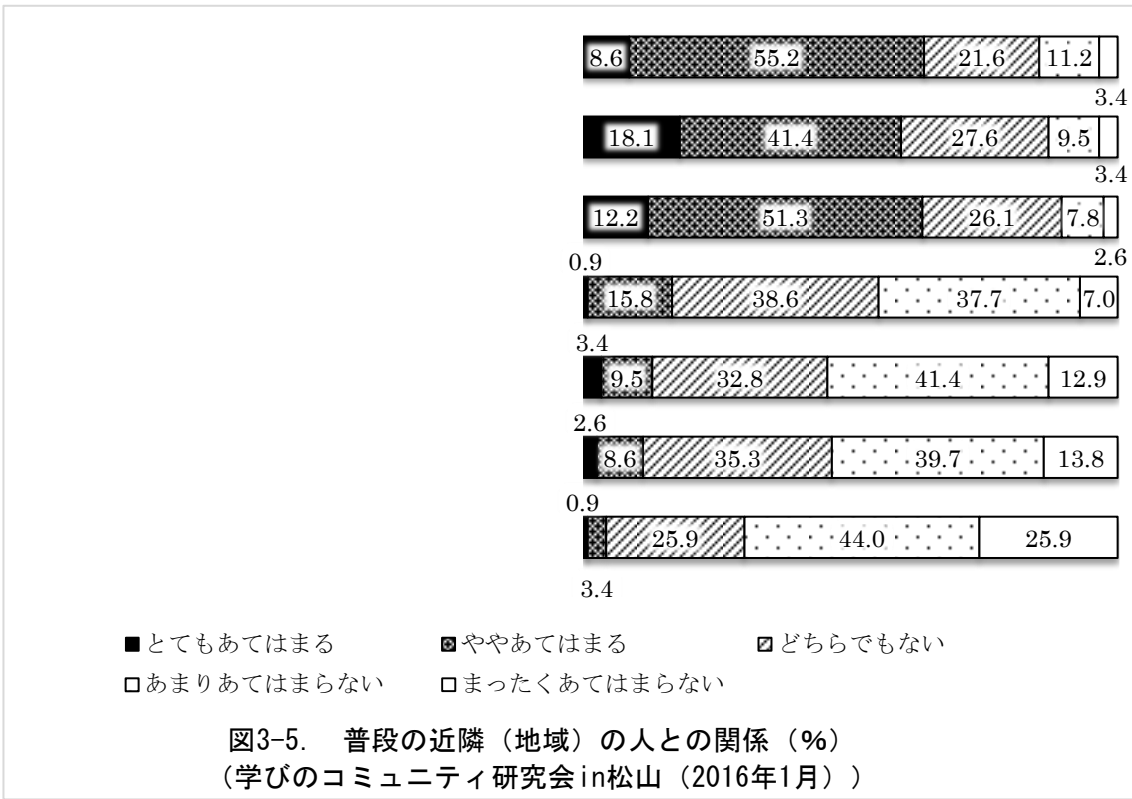
私は近隣（地域）の人ととても気持ちが通いあって<sup>15</sup>

いると感じる

私には心から信頼できる近隣（地域）の人がいると

感じる

私は近隣（地域）の人に十分に受け入れられている



私は近隣（地域）の人ととても気持ちが通いあって  
 感じる  
 私には心から信頼できる近隣（地域）の人がいると  
 感じる  
 私は近隣（地域）の人に十分に受け入れられていると



## 4. 「普段の近隣（地域）の人との関係」に関する詳細分析

### 4-1. 分析①：会場別

本節では、質問紙で尋ねた参加者の「普段の近隣（地域）の人との関係」について、やや詳細な分析を行う。

その際、本調査の結果の特性をさらに明確に把握していくために、ある比較データを参照しながら分析を行いたい。参照する比較データは、白松賢（愛媛大学）・久保田真功（富山大学）が実施した「公民館利用高齢者調査」によって得られたデータである。この調査への回答者は愛媛県内の高齢者（65歳以上）、437名であり、調査は2012年8月から2012年10月にかけて実施された。

本節では、この調査の結果を比較データとして参照しつつ、「普段の近隣（地域）の人との関係」および「生きがい」の所在について、地域教育実践交流集会（2015年12月）の参加者による回答と、学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）の参加者による回答との比較分析を行った。「公民館利用高齢者調査」は、公民館を利用している高齢者を対象に実施したものであるため、多くの回答者は、地域との関わりが非常に深いという特徴がある。こうした回答者によるデータと比較する目的は、学びのコミュニティ研究会への参加者と、地域教育実践交流集会への参加者、そして公民館利用者の学習効果の違いを明らかにするためである。

「普段の近隣（地域）の人との関係」について、その回答結果を構造的に把握するために因子分析を行った。この分析は、サンプル数の関係で「公民館利用高齢者調査」のデータセットを用いた。その結果、「地域との連帯感」と「地域における疎外感」と呼ぶうる2つの因子が抽出されたため（表4-1）、この2つの因子に着目して「連帯感」および「疎外感」を示す尺度変数を作成した。分析に先立ち、まずは使用する変数の作成方法を説明しておきたい。

上記観点からの分析を行うため、「近隣（地域）の人との関係」を示す尺度を作成した。すなわち、「普段の近隣（地域）の人との関係」について問うた7つの質問項目のうち、「私は近隣（地域）の人ととても気持ちが通いあっていると感じる」「私には心から信頼できる近隣（地域）の人がいると感じる」「私は近隣（地域）の人に十分に受け入れられていると感じる」の3項目を、「近隣（地域）の人との連帯感」（以下、「連帯感」と略記）を示す項目群とみなした。そのうえで、各回答者による3項目への回答を得点化し（とてもあてはまる：5点～まったくあてはまらない：1点）、その平均値をもって上記「連帯感」の得点とした。

また、「近隣（地域）の人とその場はうまくやっているが気持ちが通じあっていないと感じる」「近隣（地域）の人には心からうちとけて話ができる人がいないように感じる」「近隣（地域）の人には私を本当に理解してくれる人がいないように感じる」「近隣（地域）の人からとりのこされたように感じる」の4項目を、「近隣（地域）の人か

らの疎外感」(以下、「疎外感」と略記)を示す項目群とみなした。そのうえで、各回答者による4項目への回答を得点化し(とてもあてはまる:5点~まったくあてはまらない:1点)、その平均値をもって上記「疎外感」の得点とした。

これら「連帯感」および「疎外感」の得点を、普段の近隣(地域)の人との関係を示す変数とみなし、学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会への参加回数と、参加者の近隣(地域)の人との関係の関連性を分析しようと試みた。しかしながら、結論から先に述べるとすれば、種々の分析方法を試行したものの、注目すべき関連性は観察されなかった。

念のためにデータを示しておきたい。参加者の多様性が確保されている地域教育実践交流集会(2015年12月)のみのデータを用いて、先述の手順によって得られた「連帯感」と「疎外感」の各得点の平均値と、学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会へのこれまでの参加回数との相関係数を求めたところ、表4-2の結果が得られた。表4-2を一瞥するに、研究会や交流集会への参加回数と、「連帯感」「疎外感」の平均値との間に、強い相関関係はないと判断できる。参加回数の記入欄が空欄だった回収票が少なくなく、多くのケースを欠損値処理せざるを得ないという事情から、この相関分析においてはサンプルサイズが小さくなっている。そのため、全面的に信頼しうる結果かどうかは慎重に判断すべきであろう。そうした限界を前提としてではあるが、表4-2からは、学びのコミュニティ研究会や地域教育実践交流集会に参加すればするほど、

表4-1. ローカルボンド(地域との絆)に関する因子分析結果

	因子1 疎外感	因子2 連帯感
私には心から信頼できる近隣(地域)の人がいると感じる	-0.009	0.922
私は近隣(地域)の人ととても気持ちが通いあっていると感じる	0.011	0.883
私は近隣(地域)の人に十分に受け入れられていると感じる	-0.056	0.820
近隣(地域)の人には私を本当に理解してくれる人がいないように感じる	0.928	-0.012
近隣(地域)の人には心からうちとけて話ができる人がいないように感じる	0.890	-0.020
近隣(地域)の人とその場はうまくやっているが気持ちが通じあっていないと感じる	0.779	0.051
近隣(地域)の人からとりのこされたように感じる	0.636	-0.160
初期の固有値	4.614	1.050
分散の%	65.9	65.9
累積%	65.9	80.9

注:抽出法:最尤法、回転法:プロマックス回転

ただし、Cronbachの $\alpha$ 係数、適合度ともに課題があるため、参考分析として留意点を記す。

表 4-2. 参加回数と「近隣（地域）の人との関係」との相関関係

		1	2	3	4
1	学びのコミュニティ研究会 参加回数	1.00			
2	地域教育実践交流集会 参加回数	.398**	1.00		
3	近隣（地域）との連帯感	-0.05	-0.05	1.00	
4	近隣（地域）における疎外感	0.15	-0.03	-.495**	1.00

注：対象は地域教育実践交流集会（2015年12月）の参加者のみ

数値は Pearson の相関係数。\*\*が付された相関係数は両側 1% 水準で有意。

近隣(地域)の人との関係に満足するといった関係性はない、と解釈することができる。逆に、疎外感を感じているために研究会や交流集会に参加し、なんとか状況を打開したい、という参加者像も見えてこない。研究会や交流集会に複数回参加したことのある参加者は、必ずしも「連帯感」や「疎外感」といったものを感じている、あるいは抱えている、というわけではないことが示唆された。

このことをどうとらえるかは、判断の分かれるところであろう。たしかに、参加回数が多いほど近隣（地域）の人と関係性が良好であるという相関関係が観察されれば、交流会への参加を促進するメリットとして強調できる。しかし、見方を変えれば、近隣（地域）の人と関係性が良好な人たちが寄り集まる会として、一種の閉鎖性をも同時にはらんでしまう危険性があるといえる。参加回数が多いほど近隣（地域）の人と関係性が良好であるという相関関係が観察されなかった今回の結果からは、学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会が、近隣（地域）の人と密接に関わっている人とそうでない人との混合集合体として、多様性に満ちた会になっているといえる。このことは会の存在意義ないし機能として重要な性格であるから、上記相関関係が観察されなかったことを、過剰に悲観的になる必要はないだろう。

#### 4-2. 分析②：属性別

本節では、先に言及しておいたように立場別、年齢別、参加回数別にみた参加者の「普段の近隣（地域）の人との関係」に対する意識の違いを明らかにしていきたい。なお、ここで中心的に使用するデータは、地域教育実践交流集会（2015年12月）の参加者（111名）分の回答結果である。前述したように立場の点で（表 3-1）、また表は割愛しているが年齢の点で、本交流集会の参加者構成は比較的多様であった。そうしたことから、地域教育実践交流集会（2015年12月）への参加者による回答は、上記観点からの分析に適したデータセットとしてみなすことができる。

まずは、参加者の立場別にみた近隣（地域）の人との関係性について検討しよう。ここでは、上記の手順によって得られた「連帯感」と「疎外感」の各得点の平均値を参加

者の立場によって比較するために、一元配置分散分析を行った。その結果、表 4-3 の結果が得られた。

平均値の差異に有意差がみられたのは「連帯感」のみであった。「連帯感」の平均値は、行政職員（国・県・市町村）において低く、公民館関係者やその他の人々において高いという結果となった（有意水準は 1%未満）。学校教職員や NPO 関係者の平均値は同程度であり、行政職員の平均得点の低さが際立っている。これは、行政側からの地域コミュニティ構築に何かしらの難しさが横たわっていることを表していると考えられることができる。とはいえ、行政職員の回答傾向において標準偏差すなわち回答の分散度合いがもっとも大きくなっており、行政職員内部での感じ方の差異にも注意しておく必要がある。

他方で、「疎外感」の平均得点には統計的に有意な差が確認されなかった（単純に平均値のみに着目して比較すれば、「NPO 関係者」において「疎外感」の平均値がもっとも高くなっていた）。行政職員の視点に立てば、近隣（地域）の人との「連帯感」は他の立場の参加者に比べると低いものの、必ずしも近隣（地域）との関係性が悪いと感じているわけではない、と解釈できるだろう。

次に、年齢別にみた「普段の近隣（地域）の人との関係」である。先述の手順によって得られた「連帯感」と「疎外感」の各得点の平均値を、参加者の年齢段階（10 歳代～60 歳代以上）によって比較するため、一元配置分散分析を行った。その結果、表 4-4

表 4-3. 立場別にみた「近隣（地域）の人との関係」

		平均値	標準偏差	
近隣（地域）との連帯感	公民館関係者	4.08	0.56	p=0.003
	学校教職員	3.43	1.05	
	行政職員（国・県・市町村）	2.88	1.29	
	NPO 関係者	3.44	1.11	
	その他	4.04	0.55	
	合計	3.52	1.07	

		平均値	標準偏差	
近隣（地域）における疎外感	公民館関係者	2.31	0.69	p=0.102
	学校教職員	2.38	0.90	
	行政職員（国・県・市町村）	2.85	1.01	
	NPO 関係者	2.91	1.02	
	その他	2.38	0.91	
	合計	2.63	0.96	

注：対象は地域教育実践交流集会（2015 年 12 月）の参加者のみ

の結果が得られた。

「連帯感」については、有意水準が 10%未満である点に注意が必要であるが、年齢による平均得点の差が観察された。具体的には、平均得点が高いのは「60 歳代以上」であり、「20 歳代」「30 歳代」といった世代では低いという結果になっている。人数の比較的少ない「60 歳代以上」を除くと、標準偏差は 1.00 前後と同程度になっている。このことから、10 歳代～50 歳代の参加者による回答の分散度合いには大きな違いがないと判断でき、50 歳代以下では、年代に特徴的な回答傾向が観察されなかった。

「疎外感」については、先に行った立場別の分析と同様、統計的に有意な差は観察されなかった（ただし、単純に平均値のみを比較すれば、20 歳代においてやや得点が高くなっている点には注意を払っておく必要があるかもしれない）。「連帯感」の結果と比較すると「60 歳代以上」における「疎外感」の標準偏差が大きく、回答にはばらつきが見受けられる。同じような年齢段階の参加者であっても、「連帯感」と「疎外感」では回答傾向が異なるようである。

表 4-4. 年齢別にみた「近隣（地域）の人との関係」

		平均値	標準偏差	
近隣（地域）との連帯感	10 歳代	3.76	0.83	p=0.061
	20 歳代	3.20	1.12	
	30 歳代	3.18	1.17	
	40 歳代	3.49	0.98	
	50 歳代	3.70	1.16	
	60 歳代以上	4.27	0.58	
	合計	3.51	1.07	

		平均値	標準偏差	
近隣（地域）における疎外感	10 歳代	2.65	1.00	p=0.199
	20 歳代	3.00	1.03	
	30 歳代	2.61	0.73	
	40 歳代	2.63	0.91	
	50 歳代	2.24	0.91	
	60 歳代以上	2.43	1.10	
	合計	2.63	0.95	

注：対象は地域教育実践交流集会（2015 年 12 月）の参加者のみ

## 5. 「生きがい」に関する詳細分析

前節でみた「普段の近隣（地域）の人との関係」については、「公民館利用高齢者調査」への回答者の性格（公民館を利用している高齢者はそもそも近隣（地域）の人との関わりが多い）が強く反映される結果となり、「公民館利用高齢者」が「連帯感」を強く感じやすいという結果が得られた。これに対して、本節では「生きがい」の所在について分析を行っていく。

回答者がどのような活動にどの程度「生きがい」を感じているかということ进行分析するために、「生きがい」に関する変数を次のように設定した。質問紙では、「あなたは以下のことにどの程度生きがいを感じていますか。それぞれの項目に1つだけ○をつけてください」という質問文のもとに、「家族との団らん」「就労」「趣味のサークル活動」「知識や技術を生かした活動」「友人との交流」「近隣の人々との交流」「ボランティア活動」「地域行事や自治会活動」「学習活動」の9項目を提示し、各項目に「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。この各項目への回答を得点化し（とてもあてはまる：5点～まったくあてはまらない：1点）、変数として扱うことで、以下の分析を行った。

まずは、会場別に「生きがい」の所在を比較してみたい。その分析結果を表5-1に示している。

地域教育実践交流集会（2015年12月）への参加者は、学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）への参加者（学校教職員および行政職員が中心）や公民館利用高齢者よりも、「趣味のサークル活動」（有意水準0.1%未満）、「知識や技術を生かした活動」（同5%未満）、「友人との交流」（同1%未満）、「ボランティア活動」（同0.1%未満）、「学習活動」（同1%未満）において、平均値の得点が高くなっている。このことから、地域教育実践交流集会は、学習や成果を活かした活動へのモチベーション向上サイクルを達成していると考えられよう。さらには、それらの活動を参加者の「生きがい」として認識させる機能を有していると推測できる。

次に、学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会への参加回数と、「生きがい」の所在の関係に着目してみたい。この観点からの分析を行うために、次のような手順で変数を作成した。すなわち、学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会への参加回数を尋ねた質問の回答欄に、「0」と記入した回答者を「参加経験なし」の者として、カテゴリー化した。同様に、「1」と記入した回答者を「1回」経験がある者、「2」以上の数字を記入した回答者を「2回以上」経験のある者として、最終的には回答者を3つのカテゴリーに分けることとした。そのうえで、カテゴリー毎の回答者の平均値を算出し、一元配置分散分析により比較分析を行った。その結果、表5-2の結果が得られた。

表 5-1. 参加会場別にみた「生きがい」の違い

		平均値	標準偏差	
家族との団らん	公民館利用高齢者	4.40	0.84	p=0.113
	地域教育実践交流集会 (2015年12月) 参加者	4.52	0.68	
	学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) 参加者	4.56	0.68	
就労	公民館利用高齢者	3.44	1.32	p=0.000
	地域教育実践交流集会 (2015年12月) 参加者	4.12	0.89	
	学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) 参加者	4.46	0.67	
趣味のサークル活動	公民館利用高齢者	4.03	0.98	p=0.000
	地域教育実践交流集会 (2015年12月) 参加者	4.16	0.87	
	学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) 参加者	3.67	0.96	
知識や技術を生かした活動	公民館利用高齢者	3.83	1.06	p=0.033
	地域教育実践交流集会 (2015年12月) 参加者	4.11	0.91	
	学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) 参加者	3.81	0.90	
友人との交流	公民館利用高齢者	4.22	0.79	p=0.001
	地域教育実践交流集会 (2015年12月) 参加者	4.52	0.58	
	学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) 参加者	4.22	0.69	
近隣の人々との交流	公民館利用高齢者	4.03	0.85	p=0.000
	地域教育実践交流集会 (2015年12月) 参加者	3.63	0.99	
	学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) 参加者	3.41	0.98	
ボランティア活動	公民館利用高齢者	3.83	1.02	p=0.000
	地域教育実践交流集会 (2015年12月) 参加者	4.08	0.97	
	学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) 参加者	3.36	0.93	
地域行事や自治会活動	公民館利用高齢者	3.96	1.02	p=0.000
	地域教育実践交流集会 (2015年12月) 参加者	3.70	1.08	
	学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) 参加者	3.39	0.99	
学習活動	公民館利用高齢者	3.67	1.01	p=0.005
	地域教育実践交流集会 (2015年12月) 参加者	4.02	0.90	
	学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月) 参加者	3.80	0.81	

学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会の両方への参加回数と「生きがい」の間に関連が認められたのは、「就労」（学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会の両方において、有意水準 1%未満）と「ボランティア活動」（同 5%未満）のみであった。とくに「ボランティア活動」については、地域教育実践交流集会への参加回数が多いほど、「生きがい」として感じられる傾向にあった。

また、地域教育実践交流集会の参加回数のみに着目すると、有意水準 10%未満という点で判断には慎重になる必要があるが、参加回数が多いほど「近隣の人々との交流」と「学習活動」に「生きがい」を感じる傾向にあった。このことから、地域教育実践交流集会が地域の人々のボランティア活動や交流・学習活動の活性化に重要な役割を果たすため、2つの方向性を構想することが可能である。ひとつは、地域教育実践交流集会における事例発表や議論をとおして参加者が上記の活動に積極的に関与していくという方向性であり、もうひとつは、上記の活動に積極的に関与している人々が継続的に地域教育実践交流集会に参加することで、様々な実践やノウハウを蓄積していくという方向性である。両者は同時に志向・達成可能な方向性であり、地域教育実践交流集会を今後どのような場として位置づけ、展開していくかを考える際の重要な視点となるだろう。



表 5-2. 研究会および集会への参加回数と「生きがい」

		学びのコミュニティ研究会		地域教育実践交流集会	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
家族との団らん	参加経験なし	4.57	0.67	4.59	0.65
	1回	4.58	0.62	4.50	0.68
	2回以上	4.58	0.51	4.41	0.80
		p=0.996		p=0.585	
就労	参加経験なし	4.08	0.94	4.42	0.72
	1回	4.49	0.66	3.74	0.85
	2回以上	4.69	0.48	4.17	1.20
		p=0.006		p=0.001	
趣味のサークル活動	参加経験なし	4.06	0.87	3.94	0.84
	1回	3.78	0.90	4.03	0.97
	2回以上	4.00	1.08	4.33	1.03
		p=0.237		p=0.273	
知識や技術を生かした活動	参加経験なし	4.01	0.83	3.85	0.89
	1回	3.93	0.90	4.05	0.83
	2回以上	3.77	1.01	4.28	0.89
		p=0.621		p=0.152	
友人との交流	参加経験なし	4.37	0.68	4.32	0.70
	1回	4.38	0.65	4.48	0.55
	2回以上	4.46	0.52	4.50	0.62
		p=0.891		p=0.386	
近隣の人々との交流	参加経験なし	3.38	0.98	3.34	0.97
	1回	3.44	0.94	3.56	0.94
	2回以上	3.85	0.99	3.94	0.87
		p=0.287		p=0.051	
ボランティア活動	参加経験なし	3.90	0.97	3.57	1.01
	1回	3.51	0.99	3.93	0.94
	2回以上	3.31	1.11	4.28	0.96
		p=0.036		p=0.017	
地域行事や自治会活動	参加経験なし	3.48	1.10	3.37	1.02
	1回	3.62	0.96	3.58	0.98
	2回以上	3.46	1.05	3.94	1.16
		p=0.751		p=0.102	
学習活動	参加経験なし	3.78	0.81	3.72	0.84
	1回	3.91	0.87	3.85	0.83
	2回以上	4.00	0.91	4.22	0.73
		p=0.572		p=0.076	

注：分析対象は、地域教育実践交流集会（2015年12月）参加者のうち「学校教職員」「行政職員」以外の者と、学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）参加者（学校教職員の構成比 58.1%、行政職員の構成比 37.6%）の計 193 名。

## 6. おわりに

以上、学びのコミュニティ研究会および地域教育実践交流集会の参加者に対する質問紙調査の分析を通して、さまざまな角度から地域における多世代による学びのコミュニティの可能性と課題、地域教育実践交流の意義や機能が明らかになった。注目すべき点はすでに詳細に解説を行いながら述べてきたとおりであるが、報告を終えるにあたり、下記の点を付記しておきたい。

近年、公民館等の公共施設に対する「指定管理者制度」の適用がすすみ、その功罪が議論されるようになるとともに、利用者の高齢化がさらに進展している。こうした状況のなかで、地域の人々の生涯学習推進の視点から社会教育施設をいかに活用していくかは、今日改めて問い直される必要があるといえよう。行政の視点、市民運動の視点、あるいは子ども・若者の健全育成の視点から、さまざまな団体・年齢層の人々が寄り集まり、地域の多様性や開放性を包含しつつもコミュニティとしての凝集性や連帯を生み出し、維持・発展させていくことが求められている。公民館等公共施設が果たすべきそれらの古くて新しい意義と機能を今後十分に発揮するために、NPO 法人や各種の市民団体、民間団体の主体的な活動がより重要性を増してくることは、本報告書に収められたさまざまなデータから推測されうる。また、10 歳代や 20 歳代といった若年層、あるいは 30 歳代や 40 歳代といった比較的若い年齢層の人にとって、公民館等を活用したイベントや学習等が「生きがい」として認識されていくようになれば、利用頻度の高い高齢者のみならず多世代を巻き込んだかたちでのコミュニティ構築のツールとして、改めて公民館や NPO 団体の位置づけや存在意義も高まってこよう。そうした活動に多様な年齢の人々、多様な立場の人々が参画していくことが、地域の学びのコミュニティの活性化にも発展し、同時に若い力が存分に発揮される、個性的な地域教育実践の出現の基盤になるものと考えられる。

本報告書が、地域コミュニティにかかわる現代的課題に向き合うそれぞれの人々にとって、活動や連帯の一助になることが期待される。

## 7. 素集計表および自由記述

### 7-1. 素集計（述べ参加者）

（単位はすべてパーセントであり、括弧内に有効回答票の実数を記載している。）

表 7-1. 会場別参加者比

学びのコミュニティ研究会 in 新居浜（2015年8月）	6.6
学びのコミュニティ研究会 in 愛南（2015年10月）	3.9
地域教育実践交流集会（2015年12月）	42.9
学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）	46.7
合計	100.0(259)

表 7-2. 参加者の性別

男性	67.6
女性	32.4
合計	100.0(256)

表 7-3. 参加者の年齢

10歳代	6.6
20歳代	10.1
30歳代	9.3
40歳代	24.4
50歳代	38.4
60歳代	8.5
70歳代	2.7
合計	100.0(258)

表 7-4. 参加者の居住地

松山市内	31.0
愛媛県内（松山市内除く）	43.1
愛媛県外	25.9
合計	100.0(255)

表 7-5. 参加者の立場

公民館関係者	6.8
学校教職員	37.6
PTA関係者	0.8
行政職員（国・県・市町村）	26.8
民間企業	1.2
NPO関係者	16.0
その他	10.8
合計	100.0(250)

表 7-6. 発表事例はあなたの参考になりましたか？（学びのコミュニティ研究会 in 新居浜（2015年8月））

	大変なっ	なっ	あまりならな	ならな	合計
NPO アフタースクール	76.5	23.5	0.0	0.0	100.0(17)
高校生ボランティア May	64.7	35.3	0.0	0.0	100.0(17)
泉川まちづくり協議会	70.6	23.5	5.9	0.0	70.6(12)

表 7-7. 内容はあなたの参考になりましたか？（学びのコミュニティ研究会 in 愛南（2015年10月））

	大変なっ	なっ	あまりならな	ならな	合計
基調講演	90.0	10.0	0.0	0.0	100.0(10)
ぎょしょく教育の実践	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0(10)
意見交換	90.0	10.0	0.0	0.0	100.0(10)

表 7-8. 集会の内容について（地域教育実践交流集会（2015年12月））

	大変よ	よ	あまりよ	よ	合計
歓迎アトラクション	83.5	15.5	1.0	0.0	100.0(97)
歓迎ワークショップ	65.6	31.3	3.1	0.0	100.0(96)
分散会	69.9	29.1	1.0	0.0	100.0(103)
交流会	61.9	38.1	0.0	0.0	100.0(84)
特別企画	67.5	31.3	1.2	0.0	100.0(83)

表 7-9. 内容はあなたの参考になりましたか（学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月））

	大変なっ	なっ	あまりならな	ならな	合計
廣田氏講演	68.3	30.0	1.7	0.0	100.0(120)
ディスカッション	59.6	38.6	1.8	0.0	100.0(114)
総括	61.9	37.1	1.0	0.0	100.0(105)

表 7-10. 運営の在り方や今後の予定について

	非常に必要	必要	あまり必要でない	必要ない	合計
本日のように異業種の団体が集まること	78.7	20.9	0.4	0.0	100.0(254)
研究協議（話し合い）においてファシリテーターのマニュアルを作成することは ※学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）除く	30.9	53.7	13.8	1.6	100.0(123)
活動を結ぶコーディネーターは ※学びのコミュニティ研究会 in 松山（2016年1月）のみ	69.2	29.9	0.9	0.0	100.0(117)

表 7-11. 参加回数

学びのコミュニティ研究会

0回	53.2
1回	31.7
2～4回	11.3
5～9回	2.2
10回以上	1.6
合計	100.0(186)

地域教育実践交流集会

0回	48.0
1回	31.6
2～4回	13.0
5回以上	7.3
合計	100.0(177)

表 7-12. 普段の近隣（地域）の人との関係

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	合計
私は近隣（地域）の人ととても気持ちが通いあっていると感じる	13.1	45.3	23.7	12.7	5.3	100.0(245)
私には心から信頼できる近隣（地域）の人がいると感じる	23.9	39.7	20.6	10.9	4.9	100.0(247)
私は近隣（地域）の人に十分に受け入れられていると感じる	15.4	48.8	23.6	8.9	3.3	100.0(246)
近隣（地域）の人とその場はうまくやっているが気持ちが通じあっていないと感じる	2.9	19.7	31.6	38.9	7.0	100.0(244)
近隣（地域）の人には心からうちとけて話ができる人がいないように感じる	6.1	15.0	25.2	39.0	14.6	100.0(246)
近隣（地域）の人には私を本当に理解してくれる人がいないように感じる	4.9	11.4	29.4	40.4	13.9	100.0(245)
近隣（地域）の人からとりのこされたように感じる	2.0	4.9	25.5	38.1	29.6	100.0(247)

表 7-13. 生きがいを感じること

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	合計
家族との団らん	63.5	29.1	6.6	0.8	0.0	100.0(244)
就労	46.0	40.6	10.9	1.7	0.8	100.0(239)
趣味のサークル活動	29.9	41.0	22.5	4.9	1.6	100.0(244)
知識や技術を生かした活動	29.6	44.2	20.0	5.0	1.3	100.0(240)
友人との交流	44.7	46.3	8.2	0.8	0.0	100.0(244)
近隣の人々との交流	14.2	44.6	25.4	13.3	2.5	100.0(240)
ボランティア活動	26.2	34.0	29.1	9.4	1.2	100.0(244)
地域行事や自治会活動	20.2	34.2	30.9	12.3	2.5	100.0(243)
学習活動	25.8	48.8	19.7	5.3	0.4	100.0(244)

## 7-2. 自由記述一覧

(各会場における、会全体（運営方法を含む）への感想や意見を掲載している。)

### 学びのコミュニティ研究会 in 新居浜（2015年8月）

- もっとあつくならないといけませんね。
- 今日の発表の3団体についてすべて共通しているワード「持続可能な社会づくり」でした。

### 学びのコミュニティ研究会 in 愛南（2015年10月）なし

### 地域教育実践交流集会（2015年12月）

- 初めて参加させてもらいましたが、新しいことに多くふれることができとても楽しませていただきました。
- 同じ大学生でも違う活動を行っている人と話す機会となり興味深い話ができました。違う活動を行っていても根本は同じなんだろうなと思いました。とても刺激を受けました。
- これからも県をとびこえて、こうした交流ができることを願っています。
- 今回、いろいろな観点から地域の発展を目指す人々のお話を聞いて良い経験になりました。プレゼン能力の高さに驚きました。これからもユネスコ部の活動に活かしていこうと思います。
- ファシリテーションの見える化という点では、マニュアルがあるといいのかもしれ

ませんが、その他においては、マニュアルより実践のような気がしますし、市販のものでも十分活用できるのでは？と思います。

- マスメディアへのアプローチが必要では。主権者ではなく第三者による情報発信が必要だと思います。
- 高校生の活動にとっても驚きました。一步外に出ればこのような素敵な出会いがあることが嬉しいです。町を担っていく若者の可能性、私自身もまだまだやれる！やらなきゃいけない！と強く感じました。
- 小・中学校が地域活動に参加する事例は多くありますが、Mayのように高校生が地域活動に関わり、自発的に新居浜市全体を盛り上げていこうとする気持ちに感動しました。また、寄り添う大人の方々にも同じように感動しました。ぜひ、松山市でも！
- 分散会は興味のあるものをえらべるといいと思いました。
- 飯田 OIDE 長姫高校や、NPO 縁塾、ボランティアサークル May で活動している高校生のお話しに、とても刺激を受けました。自分の学生時代では、まったく考えたこともなかった地域活動で活躍されていて驚きました。
- 自分の身近に還元していきたいと思います。
- 交流会での音響がもう少し良ければ良かった。
- 全国からの事例が、地元で聴ける、交流ができ、来年もぜひ参加させていただきたいと思います。
- 異業種の団体との関わりの中で多くの刺激、学び、今後自分の活動への取り組みのヒントが得られると感じる。
- たくさんの刺激がとても楽しく、学びになった。
- 大会の全体日程、動き方が分からない部分も多くあった。オリエンテーションの内容は詳細にお願いしたかった。異業種、異分野の人との交流は必要だと思う。それゆえに話がバラバラに見えてしまうので、エッセンスを抽出したり共通点をつなぐコーディネーター、ファシリテーター的な人が欲しかった。より多くの実践例を外から集める方に予算を割かれたと思います。その他の運営面で工夫される様子がかがえました。
- 地域の拠点としての公民館活動の重要性に気づかされた。子どもたちは〇〇〇で育った、育てられたという体験は、必ず地域とのポンドとなるし、アイデンティティを確立するのにも、大切なんだなと感じた。
- 交流会は、マイクが聞こえなく、柱が邪魔で進行が全然分からなかった。
- 時間配分がむずかしいので、ある程度のマニュアルは必要だと思う。
- 多くの地域から集まっており、交流が深まってよかった。
- 県内外、様々な業種の方がおり、刺激となりました。
- 特別企画の高校生編がよかった。今の高校生の中にもこんなに地域の事を思っ

んばっている子どもたちがいるのだと感心しました。

- 初めて参加しましたが、日程確認や宿泊に関するアナウンスが全くありませんでした。県外から参加する立場としてとても不親切な会だと失礼ながら感じました。(注意事項を紙に書くだけで充分だと思いますが) 会の主旨や内容は素晴らしいので、運営面をもっと改善なされると、もっと素晴らしい会になると思います。
- 発表内容は同じで良いので、分散会を2日間してほしい。
- 後半の「公民館・地域編」の事例は、悩みを出しきれていないので、フロアからもうまくつつこめなかったなあと思いました。ノウハウ、地域との接点、企画という三つの役割分担が大事だということを持ちかえます。
- 「坊ちゃん劇場」の方が分散会で強引に資金集めのPRをしたのは閉口しました。どの団体でも会員集めや資金集めに苦勞しているのですから、事前にそういうPRはいましてほしいです。

#### **学びのコミュニティ研究会 in 松山 (2016年1月)**

- 人口減少の上、中等教育学校への進学が多くなり地元の中学校の生徒が激減していて、部活動も限られている。
- 学校の先生、地域の大人、保護者、それぞれが抱く「子ども像」を知り、目指す子ども像を共有する必要性を感じます。社会の変化、そこに立ち向かいよりよく生きる子を育てるためには「教育」のとらえを変えていく必要があります。今の大人たちが教育を考える時、自分たちの受けていた教育ういベースに考える傾向は強いと思います。特に、地域の方は教育の専門家ではないので、その傾向は大きいのではないのでしょうか。本当の意味で、どういう人間を育てていくのか、どのような力が必要か、「価値観」の変革が求められていると思います。変えていくための踏み出す勇氣、覚悟があるのだと思います。「学力」1つにとっても、数値、順位だけが前面に出るようなとらえでは変革は起きにくいように感じています。
- やはりこういう勉強会は少人数、アットホームさがないと本当の会の目的にせまれませんね。
- 文科省は、コミュニティスクールと熟議の考え方を捨てるべき、もっと日本的解決法を考えるべきだと思う。もっと先のことを考えて！
- 議論は進んでも学校と社会教育の溝は埋まらない。それを埋めるのは、ふれない教育長のリーダーシップしかないと思う。(校長に任すのは無理だと実感した) 文科省できないことを進めるのはやめて、理想の要望に応じた施策をしてほしいと念願する。
- 地域の実態や学校の存続等、CSに対する取り組みには大きな壁もあると思うが、よりよい地域との連携が進められていくよう、今後も学んでいきたい。



- 人数が多いと、語り合うのは難しいと感じました。仕掛け、工夫がもう1つ必要ですね。
- 大切なことを、講師の方からたくさん教えていただきました。人口が減少し、コミュニティの再構築が必要になる時期。学校や公民館と拠点とするより（1つの拠点などと甘い言い方をするより）思いをひとつにして、統一できないものかと思ってしまう。子どもの将来を考えることは自分たちの生き方を反省することである。
- NPO関係者ももっと勉強した方が良いと感じました。まつやまNPOサポートセンターなどと共催で「コミュニティスクール」勉強会などすると良いかもしれません。
- 教員免許更新、学校評価、民間人採用等学校を開くことは重要だが、教員に対する社会的尊厳がより重要であると考えます。
- 他県の取り組みを知ることができ、視野が広がった。
- 実際に取り組んでこられた方々や来年度取り入れようと一歩一歩進めておられる考え方や経験談を聞くことができ、とても参考になりました。
- 「ディスカッション」では、いろいろな立場や経験から事例や意見を学ぶことができ、本校の同じ悩みの解決策を得ることができました。まず、熟議からスタートしていきたいと思います。
- 異業種が集まったが、ともに何かをしようというビジョンは築きにくかった。
- 研究会に関心があり、教育の力で地域創生を考えることができる素晴らしい研究会でした。しかし、若年者にとって、管理職の方や教育委員会の方ばかりだったので、今後の参加がしづらいという気持ちが残りました。もっと、若手教員などに広く開かれたものになってほしいと思います。

8回「地域教育実践交流集会実行委員会」世話人代表 讃岐 幸治  
実行委員

浅野 長武・井門 照雄・井上 英明・上田 和子・宇都宮 正男・遠藤 敏朗・  
大森 茂樹・小笠原 貴久・鍵山 直人・小池 源規・國分 美由紀・佐伯 紀美子・  
堺 雅子・佐藤 郁子・篠原 茂・関 福生・仙波 英徳・高岸 ちはり・竹内 よし子・武  
智 理恵・田鍋 修・常川 真由美・中尾 茂樹・中尾 治司・長尾 真二・  
長島 道子・中本 克也・灘岡 雅人・西川 浩司・西坂 淳・西山 博・本田 精志・  
升田 須賀子・松本 宏・松村 暢彦・眞鍋 幸一・村上 伸二・谷川 玲子・  
吉岡 友美・吉見 香奈子・若松 進一・和田 瑞穂